

世界の分子としての僕

弘前大学教育学部附属中学校

吉田 蒼汰

「面倒くさいなあ。」

中学生になった僕は、中学受験も終わって、ゴールが分からなくなってしまう。勉強も面倒くさい、将来はできれば楽に生きたいとも思っていた。毎日楽しいけれど、もやもやして不安がおそってくる。こんな自分じゃだめだと心のどこかで分かっていた。そんな時、もしかしたら生き方を教えてくれるかなと期待して、この本を手にとった。

この本は、自分と同じく悩んでいる中学生のコペル君の話だった。コペル君は優しく誠実だ。友達に対して正直だし、友達への謝罪の手紙に、

「君たちのこと、どうでもいいと思っただことは、一秒だってありません。」

と綴る。こんなに大切に思ってくれるなんて、もし同じクラスにいたら絶対に仲良くなりた。でも、そんなコペル君の悩む心の中は、意外にも僕そっくりだった。僕は驚きながらも、少しほっとした。

僕が心に残った事件がある。友達が上級生になぐられるような事になったら、みんなと一緒に、と約束したのに、自分を守るために約束を破ってしまう。その姿を見て、卑怯ヒソカでかつこ悪いと思っただけれど、後悔して言い訳を一生懸命考えているコペル君は、僕と似ているとも思った。

僕は、言い訳を言う時、心の中では本当は良くないと分かっているけれど、認めたら自分をもっとダメだと思ってしまう。だから、自分の気持ちもごまかして言い訳を続けていた。でも、コペル君は結局言い訳をせず、手紙で正直な気持ちで謝った。その姿を見てえらいなあと思ひ、同時に僕もコペル君のようにすればよかつたと思ひ、後悔した。

コペル君も、謝るまでとても後悔していた。でも、コペル君のおじさんは、その間違いも間違つて良かったと教える。えっ？間違わないでいる方が良いんじゃない？と僕は思った。でも、おじさんは、

「自分の過ちを認めることはつらい。しかし過ちをつらく感

じるといふことの中に、人間の立派さもあるんだ。」

と教えてくれた。自分の過ちの後に、どのように行動するかがその人の強さになるのだと思つた。それに、後悔をするのは自分の中の良心に従つて行動する能力があるからだとおじさんが教えてくれた。僕は後悔を引かずつて落ち込んでしまふことが多かつたけれど、その後悔から学ぼうとすれば無駄にならないと気付き、勇気づけられた。

また、僕が感心したのは、コペル君が考えた「人間分子の關係、網目の法則」というものだ。これは、人間は世界の中の分子で、大勢の人と網のようにつながつていてというものだ。僕は考えた事もなかつた。コペル君は、自分中心ではなく、俯瞰的に捉えて、自分は、世界の一部分だと考えていた。僕は自分中心の世界で、自分がどう行動すれば、幸せになるかしか考えていなかつた。恥ずかしいと思つた。自分が正しいとばかり思うと、自己中心的な考えになつてしまふけれど、

自分が世界の一分子だと思つと、自分は世界にどんな事ができるかを考えてられると思つた。僕はそのことを学んで、まづ「他の人の役に立ちたい」と思つた。僕は小さな分子だけれど、分子の動きは他の分子に働きかけることができる。そう思うと、自分が幸せではなく、周りも幸せにすることが幸せなのだと思つた。

世界が分子の集まりだとすると、一つ一つの分子は、互いに助け合える力があると思う。なぜならおじさんが、「人間は憎み合つたり、敵対しあつたりする時に苦痛を感じる。それは、人間の本来の姿ではないからだ。」と教えてくれたからだ。

この本は、最後に「君たちはどう生きるか」と問う。僕は、他の分子と手を取り合う分子でありたい。正直で優しくありたい。そして、

「他の人のために行動する人間になりたい。」